87 フジ鋼業（加古川市）　防災・農業用品メーカー

次の一手

～激動の中で　兵庫の企業～

「一代一業」己に課し止水板開発。

「一代一業」。社長のぜっとに、一つの業を確立する―。亡き父と兄から2015年に家業を継ぎ、この言葉を己に課した。3年前、新たな事業に打って出た。主力の農業用刈物から離れ、社名にある「鋼」もほとんど使わない。ABS樹脂でできた防災用の止水板だ。

（データ）1965年、三木市で創業。2019年に法人化。23年9月期の売上高は約3億円。従業員約10人。止水板は中国の合弁会社で製造。オープン価格だが、高さ約50㌢で1枚数万円程度。藤井健吾社長は三木市出身。八代学院高（現・神戸国際大付属高）卒。

2022年に中国・河南省で発生した豪雨の際、水をせき止めるフロード・ガードF」（フジ鋼業提供）

高さ約50㌢と約80㌢のL字形で、最大300㍍その水圧に耐える。パーツをつなげば幅90㌢以上のあらゆる開口に対応し、止水ラインを一直線にもカーブにもできる。「端から端までふさがないと意味がない。突破口があれば、水はそこから流れ込む」。藤井社長は長所が強調する。

ライバルは土のうだ。「安価で、手軽なイメージ。しかし重いし、最近は土が取れる場所もない」。吸水材が入った市販品は、災害時には先り忘れがちな上、水を吸った後の処理も面倒だ。自社の止水板なら「1枚4～8㌔なので一人でも持ち運べ、洗えばまた使える」と利点を説く。

会社は父が機械メーカーとして創業し、兄が草刈り機などに使う刈物の製造販売で発展させた。ただ農家が減少し、先細りを危ぶんでいた。

19年、藤井氏が中国に出張中、日本を台風19号が襲った。関東や東北地方などで甚大な被害が出る中、中国国内で止水板が力を発揮する動画を目にした。その日のうちに現地メーカーに連絡。代理店として日本向けに販売を始めた。が、日本で試験すると水が漏れてしまった。

そこで生きたのが藤井氏の設計力だ。先代の2人が働いたころは「父が製品の構造を考え、僕がつくり、兄が売る」役割分担だった。手書きのスケッチから構造を見直し、自社製品化にこぎ着けた。試験用に、実家にコンクリートの屋プールまでつくった。展示会でPRを重ね、官公庁や商社紹介、地下街など他品実績は300に近づいた。

今年は高さ100㌢の新シリーズを投入予定。中国から要望があったという。河川工事など防災以外の用途でも商機をうかがう。電気自動車（EV）の火災に備え、リチウムイオン電池を冷却するための簡易プール用にも提案しようとしている。

防災用は、全国の代理店網を通じて現地調査を必ず実施する。顧客の実財を確実に守りたいからだ。「ハザードマップが赤いところは、全てお断さま。またも重及させなければ」と使命感を持く。（広岡慶明）

◇原則、毎週木曜に掲載します。

L字形の止水板「フロード・ガードF」を示すフジ鋼業の藤井健吾社長。2023年にはグッドデザイン賞に選ばれた＝加古川市野口町水足